

学位論文審査の要旨

学位申請者	山下 愛実 人間発達科学専攻2017年度生	論文題目	幼稚園の一斉活動場面における「隙間」の意味
審査委員	主査:	刑部 育子 教授	インターネット公表
	副査:	浜口 順子 教授	
	副査:	小玉 亮子 教授	
	審査委員:	松島 のり子 助教	
	審査委員:	辻谷 真知子 助教	
学位名称	博士 人文科学		学位論文の全文公表の可否： <input checked="" type="checkbox"/> 否
(英語名)	(Ph. D. in Child Studies)		「否」の場合の理由 <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、幼稚園における一斉活動場面に焦点をあてた観察研究である。保育者が集団において一斉活動を行う場合には、子どもたちは保育者の意図に即して一斉に同じことをするように求められることが多い。しかし、子どもたちは保育者の意図通りの行為をするのみならず、保育者の計画や意図から外れた行為を即興的に生み出すことがある。有用性や効率性を目指す保育観においては、このような子どもの逸脱的行為は大人からは無駄で無用なものとされる傾向も強く、保育者にとっては意図通りに子どもが動かなかったことへの自らの保育実践への至らなさや焦りを抱え、葛藤する場面でもある。しかし、本論文では子どもたちが生み出した逸脱的にも見える生命感溢れる行為に着目し、保育者の意図から外れた子どもたちの姿や行為にも保育者が意味を感じ取り、保育者が共感を持って子どもの姿を受け入れるようになるまでにどのような過程が見られたのかに着目した。このような現象を読み解く理論的視座として、Lave & Wenger (1991) による状況的学習論、Wenger (1990) による「隙間の実践共同体」という概念を援用し、保育者が意図する公式的な実践において非公式的な「隙間」の実践が子どもたちの間で生み出されることの意味に新人保育者がどのように出会い直し、関わりが変容していくのかを明らかにした。

長期にわたる本研究の観察の結果からは、当初、保育者の意図から外れた子どもの行為（本研究ではこのような子どもが創出する実践を「隙間」の実践と呼ぶ）に対して、新人保育者は「今は〇〇する時間ではありません」と子どもを制止することもあった。しかし、同じ場面を見ていた観察者が観察記録を新人保育者と共有し「子どもっておもしろいね」と話をする中で、保育者は観察者の異なるまなざしに触れ、保育者自身も観察者の視点を取り入れ子どもの行為に共感し、子どもに合わせて柔軟に保育を変える姿が見られるようになったことが明らかにされた。

第1回目の審査会(2022年6月29日)では、丁寧な記述の論文であり、幼稚園の一斉保育場面に焦点をあてたユニークな視点からの保育学研究ではあると評価された。しかし、新人保育者の子ども理解の生成に関する論文なのか、「あいま」に着目する保育的視点の重要性を追求する論文なのかわからないといった指摘がなされた。第2回目の審査会(2022年9月8日)においても大幅な修正を施したものの、全体を通じて研究の「問い」がまだ明確になっていなかった。審査者から「あいま」という独自の概念を使って最初から説明するよりも、より一般的な「隙間」の概念で先行研究を整理して議論するほうがよいのではないかと助言を受けた。第3回審査会(2022年11月25日)では、「隙間」として議論を再構成したことにより本論文の論点が明確になり、さらに改稿して第4回目の審査会で確認することとなった。第4回審査会(2023年2月8日)では序論でさらに大幅な加筆がなされたが、先行研究に対する本研究の知見が結論で十分に書ききれていないとの指摘により、修正後の確認が必要とされたため、第5回目の審査会を実施することになった。第5回審査会(2023年2月24日)では改稿に関して概ね了承され、若干の文章表現上の修正の必要性が指摘されたが、公開発表会の開催が了承された。

2023年2月28日に行われた公開発表会では、執筆者から論文の概要の説明がなされ、参加者からの活発な質問が出された。公開発表会後の最終審査会では、論文の概要が適切に説明され、また、質問に対しても丁寧かつ適切に回答を行ない、専門分野についての十分な知見があることが確認された。以上のことから、審査委員全員の賛成によって申請論文を、博士(人文科学)、Ph. D. in Child Studies の学位に相応しいものと判断し合格とした。